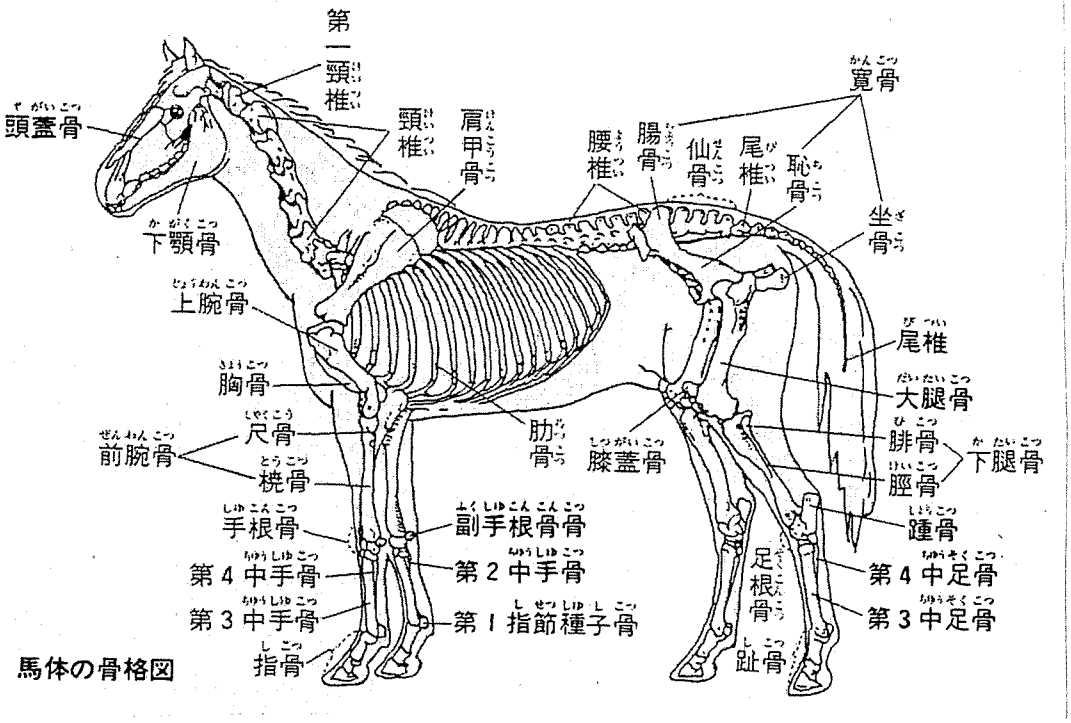
篠原東遺跡群現地説明会資料



馬体の骨格図

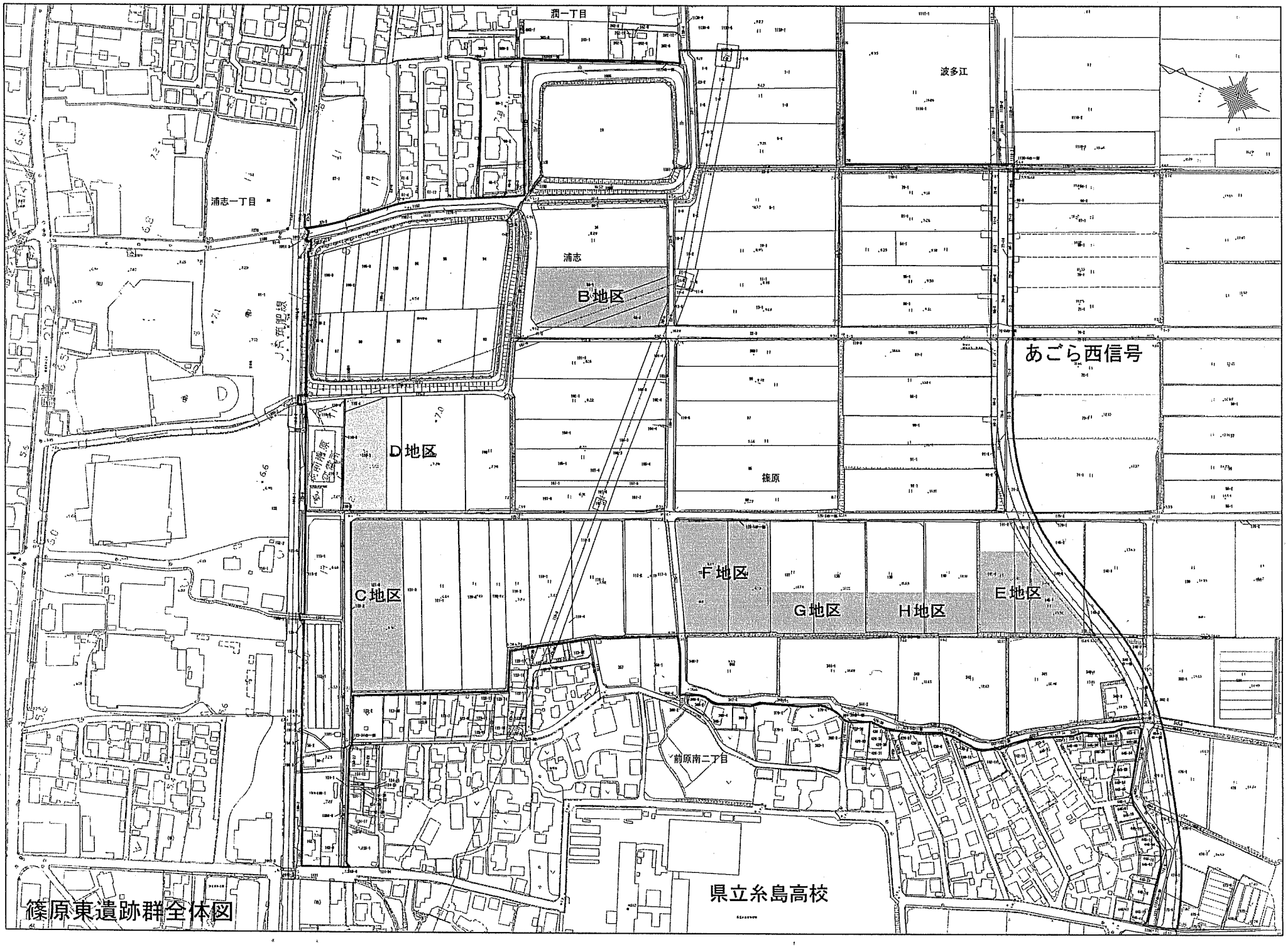
日時

平成25年12月8日（日）10：00～

場所

糸島市篠原139番地

糸島市教育委員会


潤一丁目
波多江
浦志一丁目
浦志
B地区
あごら西信号
D地区
篠原
C地区
F地区
G地区
H地区
E地区
前原南二丁目
県立糸島高校

篠原東遺跡群全体図

１．はじめに

この調査は、前原東土地区画整理事業に伴って、失われる遺跡を記録するために行われています。平成24年度から平成27年度まで調査を行う予定です。今年度は、工事予定に合わせる形で、Ｂ～Ｇ地区の７地点の調査を行う予定にしており、現在、Ｃ、Ｅ、Ｆ地区の調査が行われています。

今回の現地説明会は、Ｅ地区を対象としています。

２．篠原東遺跡群Ｅ地区の調査概要

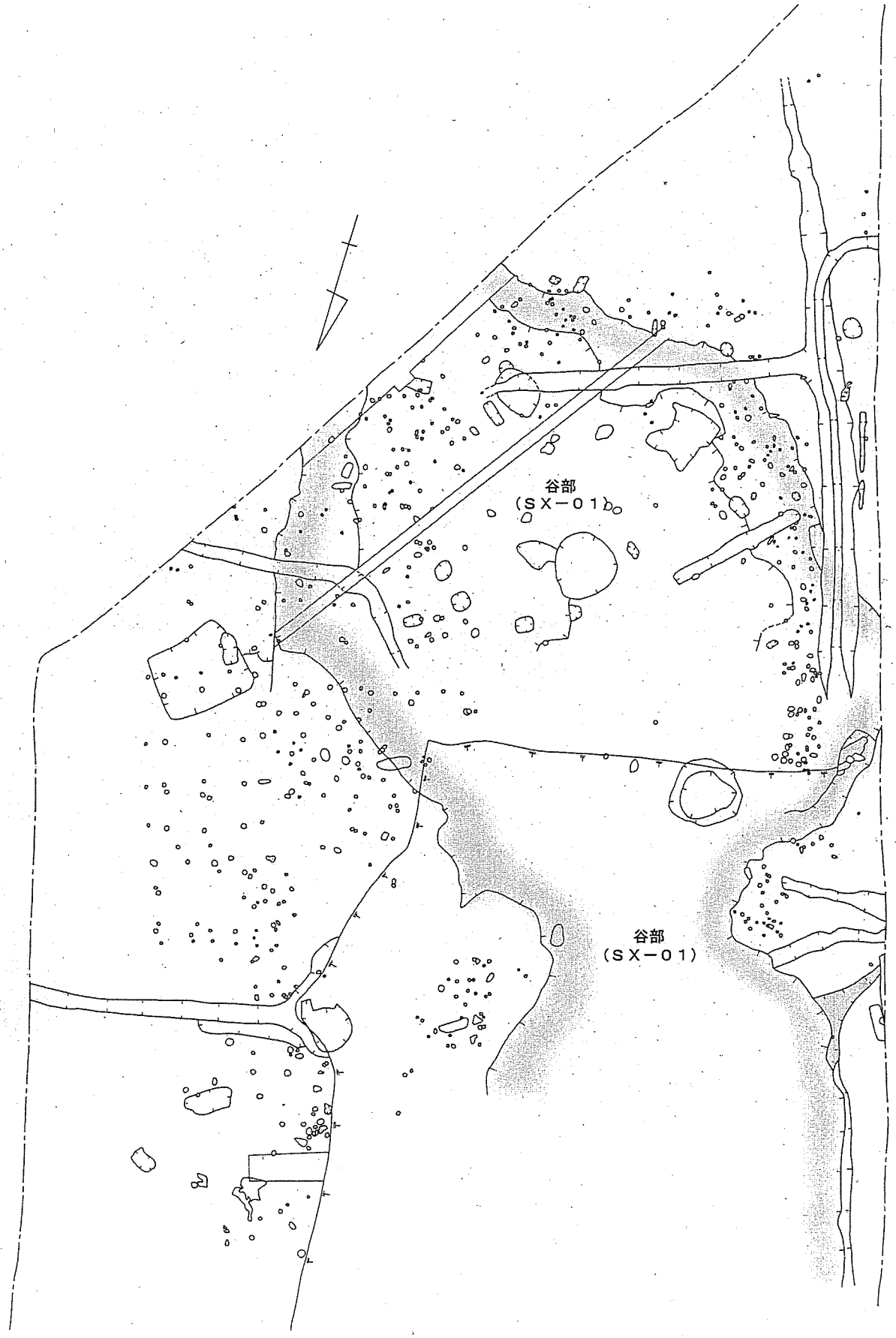
この地区では、4つの時代の遺跡が一ヶ所から見つかっている複合遺跡となっています。篠原１行政区から台地が延びてきており、本調査区では、台地と台地の間に谷部（ＳＸ－０１）が形成されています。

この谷部（ＳＸ－01）は、弥生時代前期後半から弥生時代中期前半にかけて、ゴミ捨て場として使用されていたようで、甕や壷などの土器の他に、今山産石斧（いまやまさんせきふ）、扁平片刃石斧（へんぺいかたばせきふ）、石錘（せきすい）、紡錘車（ぼうすいしゃ）、石包丁（いしぼうちょう）などが出土していますが、いずれも破損して捨てられたものばかりで、完全な形を残すものは、ほとんどありません。ゴミ捨て場があるということは、周囲にこの時期の集落があったものと推測されます。

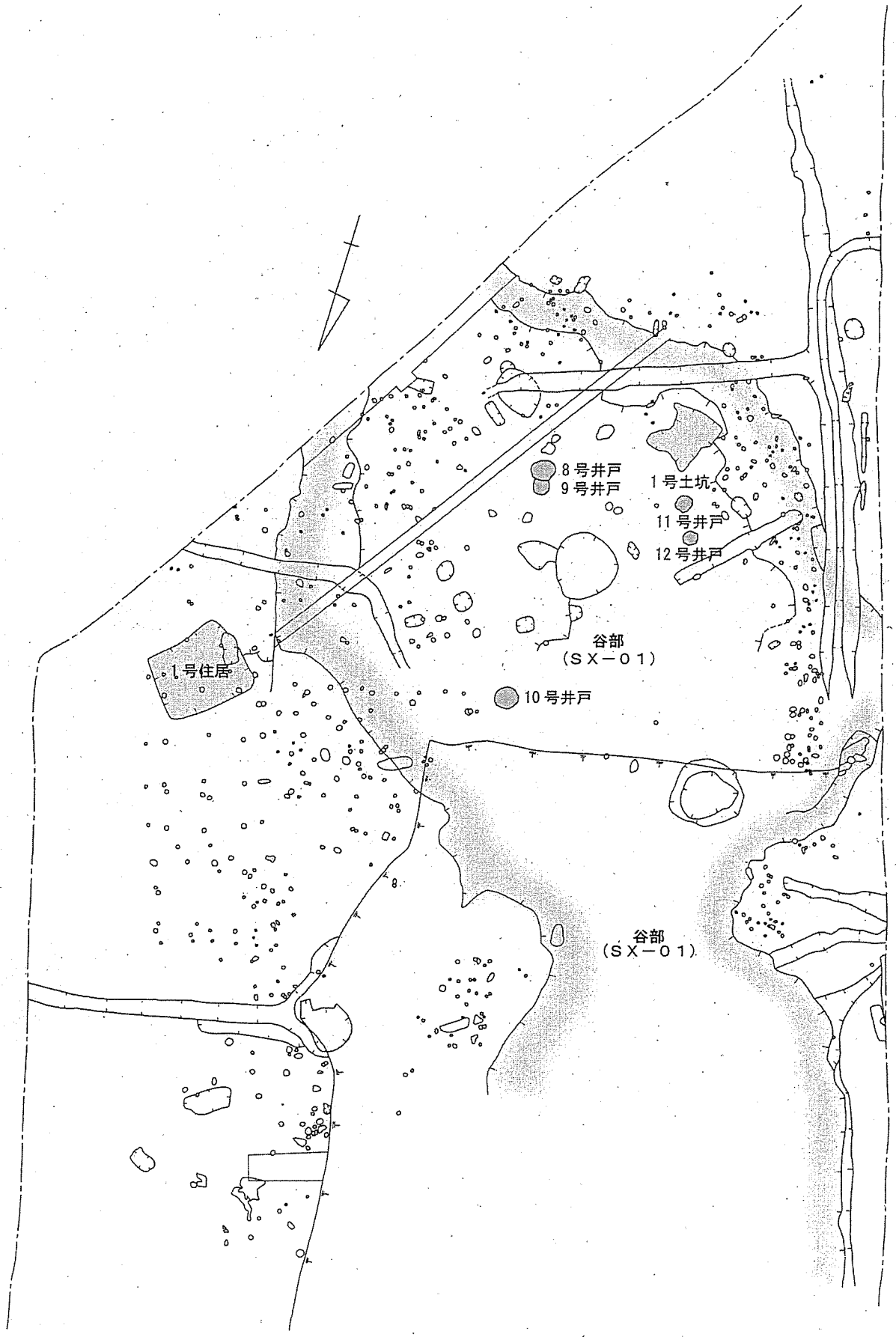
次の生活痕跡は、古墳時代前期～中期です。この時期には、台地上に竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）１軒と谷部（ＳＸ－０１）に井戸が３基造（つく）られています。井戸の底からは、土器が多く見つかっており、井戸を廃棄する際に、お祭りをしたものと考えられます。この時期から、谷部に井戸が造られ始めます。

古代（奈良時代～平安時代）に入ると、やはり、谷部に井戸が造られています。8号井戸からは曲げ物の部材、9号井戸からは怡土城で使用される瓦が出土しています。

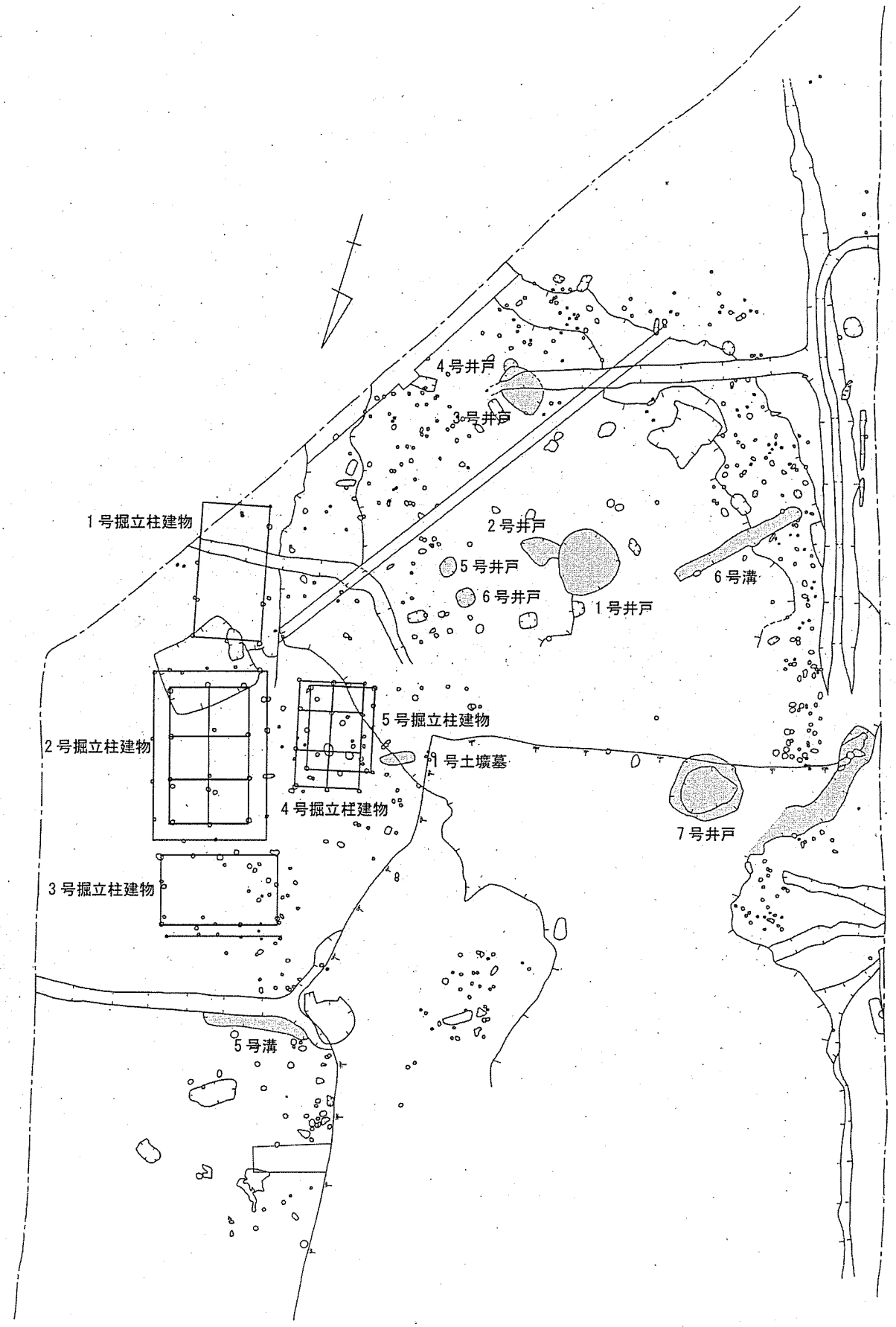
続く中世の時期（平安時代末期～鎌倉時代）には、掘立柱建物５棟と井戸７基が見つかりました。建物の軸は２号と３号、１号と4、5号が同じで、総柱建物と側柱建物の組み合わせが確認でき、１時期2～3棟で構成される屋敷地と考えられます。また、１号土壙墓（どこうぼ）は屋敷地内にあるお墓で、屋敷墓（やしきぼ）と呼ばれています。このような建物の構成は、有力農民層の建物と推測されます。



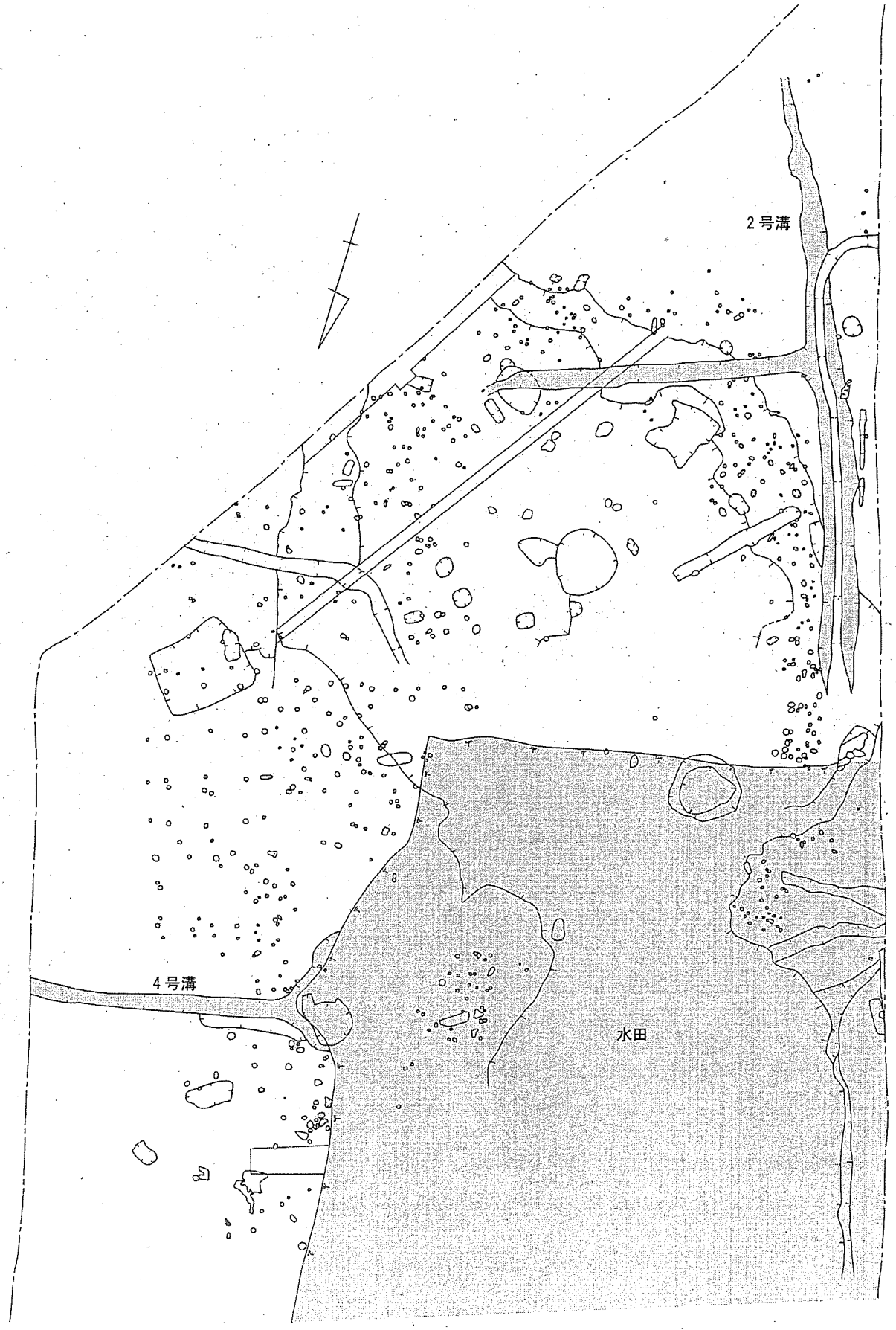
篠原東遺跡群全体図（1/300）、弥生時代前期後半～中期前葉



篠原東遺跡群全体図（1/300）、古墳時代前期，奈良～平安時代



篠原東遺跡群全体図（1/300）、平安時代末～鎌倉時代



篠原東遺跡群全体図（1/300）、江戸時代

この谷部は、鎌倉時代から室町時代にかけて完全に埋没し、江戸時代に入ると、ここに水田が造られるようになります。この水田は、区割りを変えながら、現在まで利用されています。

３．７号井戸から出土した馬骨について

７号井戸は、谷部に造られた長さ 3.5m、幅 2.9m、深さ 0.7mの歪な円形状に掘られた素掘りの井戸です。馬骨は、全身があるように見えますが、頸椎(けいつい)が無いことや胸骨(きょうこつ)から恥骨(ちこつ)にかけて乱れている部分があります。

馬を食べていた可能性が無いわけではありませんが、平安時代には馬肉が有毒と信じられていること、博多遺跡群で井戸から出土した馬の全身骨格が、肉を取らず、皮だけ剥いでいるようですので、食べた可能性は低いのかもしれません。

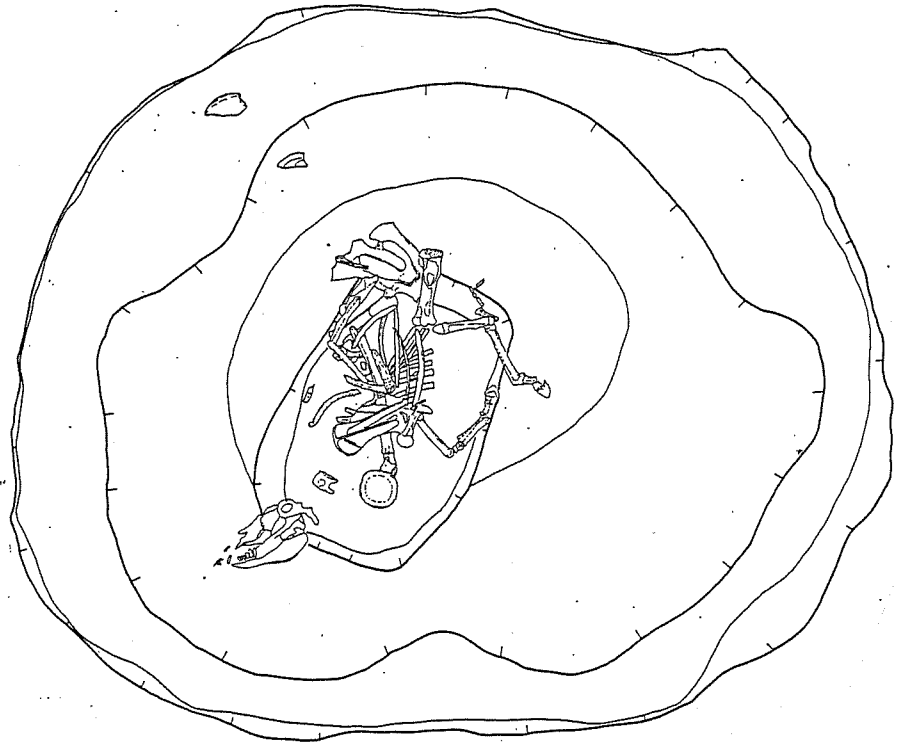
一方、『日本書紀』や『続日本紀』には、雨乞いや止雨を祈願する際、馬を神に奉納した記事が多く見られます。また、東北や北陸では、馬骨を滝壺や川の中に投げ込んで、その穢れで雨神を誘う民俗事例があり、馬骨には呪術的な意味があったと考えられます。

したがって、今後、馬骨の詳しい分析を行う予定ですが、仮に食したものでなければ、馬骨は、井戸の湧水が多いことを祈願する際に、井戸の神霊に対する供物として使用された可能性があります。

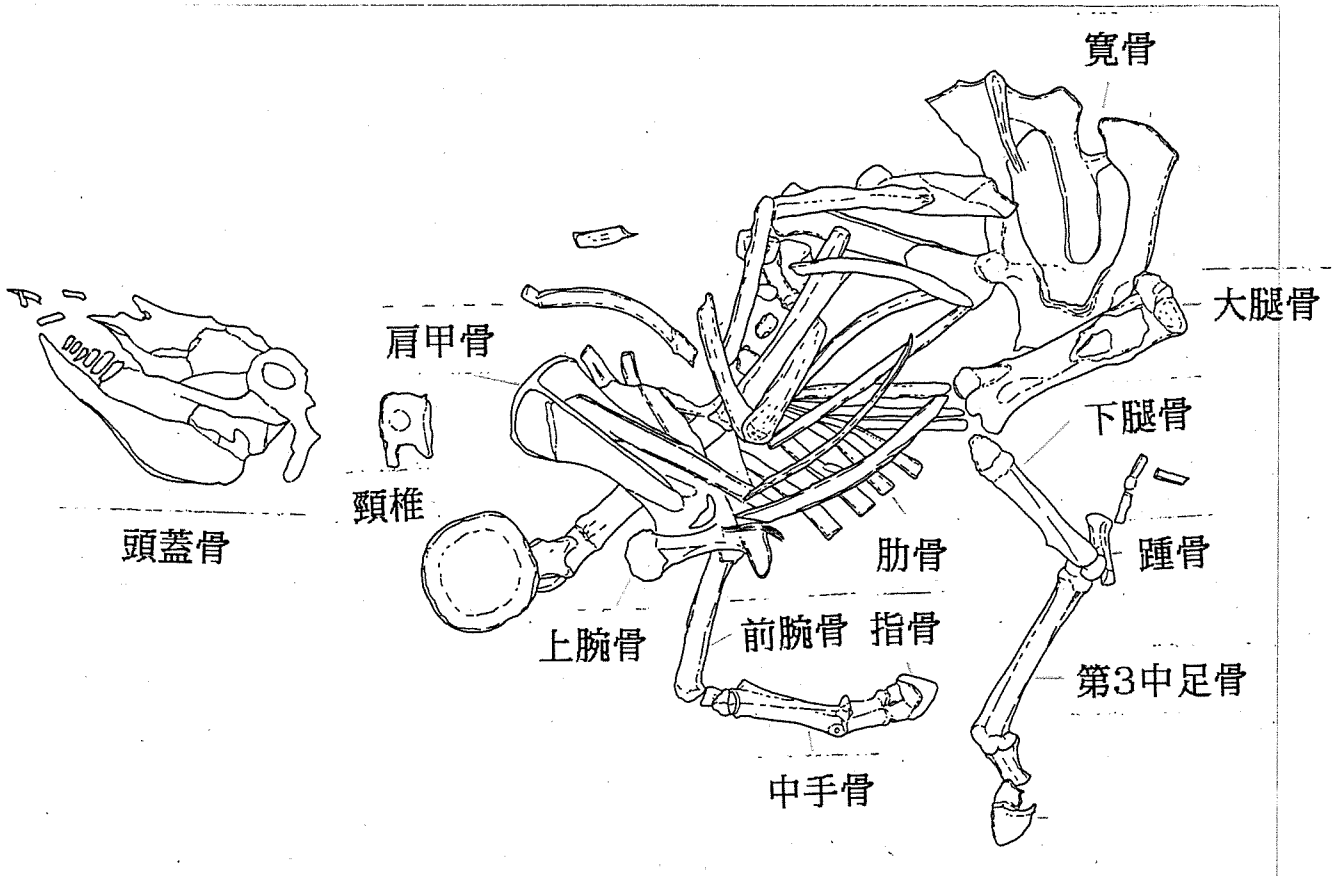
４．まとめ

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、古代、中世、江戸時代と形を変えながら、人々が生活した痕跡をうかがい知ることができました。特に谷部（ＳＸ－０１）は、弥生時代ではゴミ捨て場、古墳時代～中世では、低地で水位が高いことから、井戸を掘っていました。そして、谷部が完全に埋まってしまう江戸時代には、水田として利用されました。

このように、昔の人々は、その土地の環境をうまく利用して、生きていたことが分かると同時に、このような長い歴史の上に、今の景観があることを教えてくれます。



7号井戸完掘状況(1／30)



馬骨出土状況(1／10)

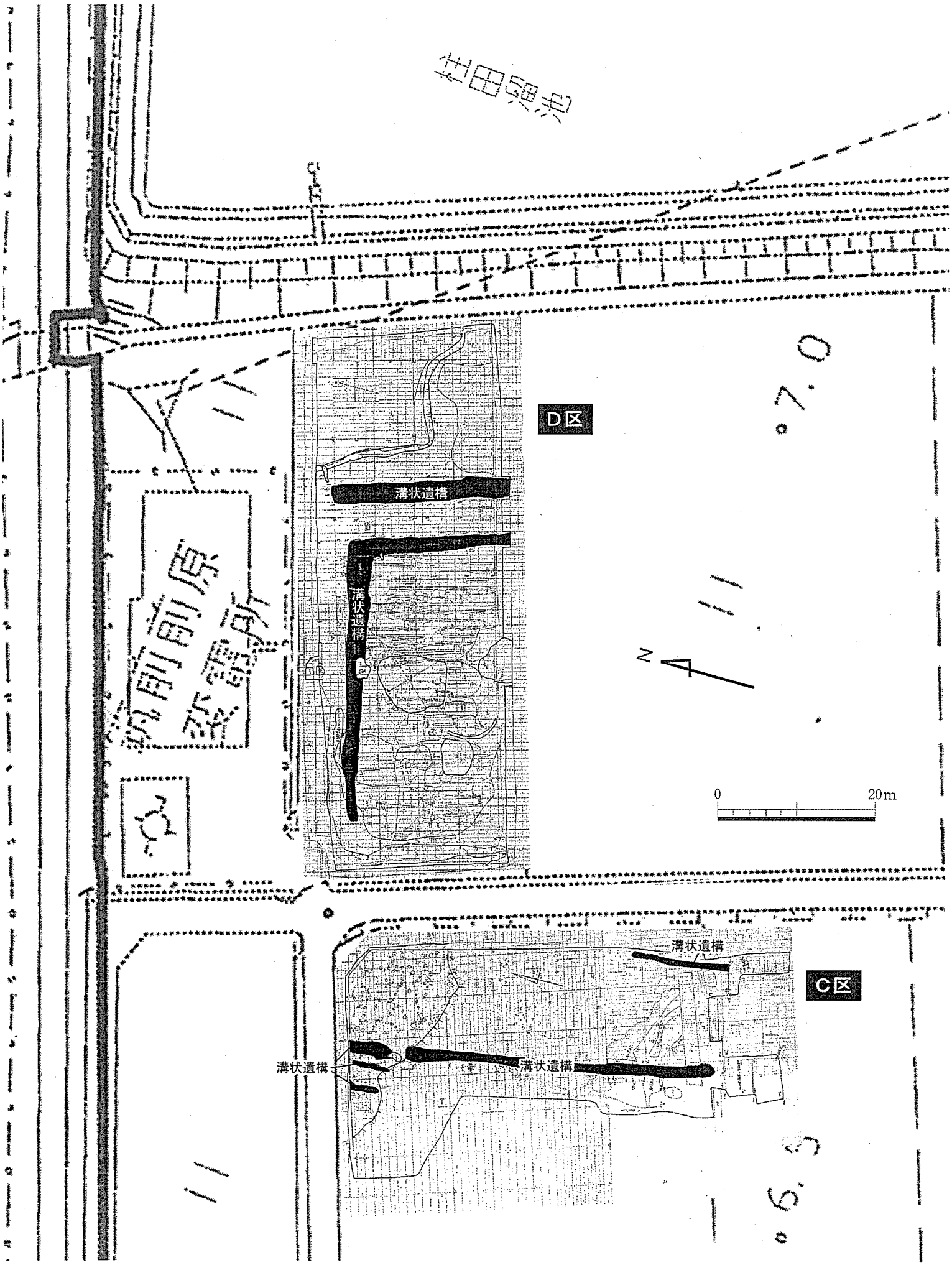
5．参考資料（※主な出土品のみ展示）

篠原東遺跡群Ｃ、Ｄ区では、戦国時代の 15 世紀末～16 世紀にかけての遺構や遺物が出土しています。まず、Ｃ区では南北に走る 3 本の溝、多数の柱穴などが確認され、鍋や小皿などの土器類、漆器（しっき）や柱材などの木器類が出土しました。

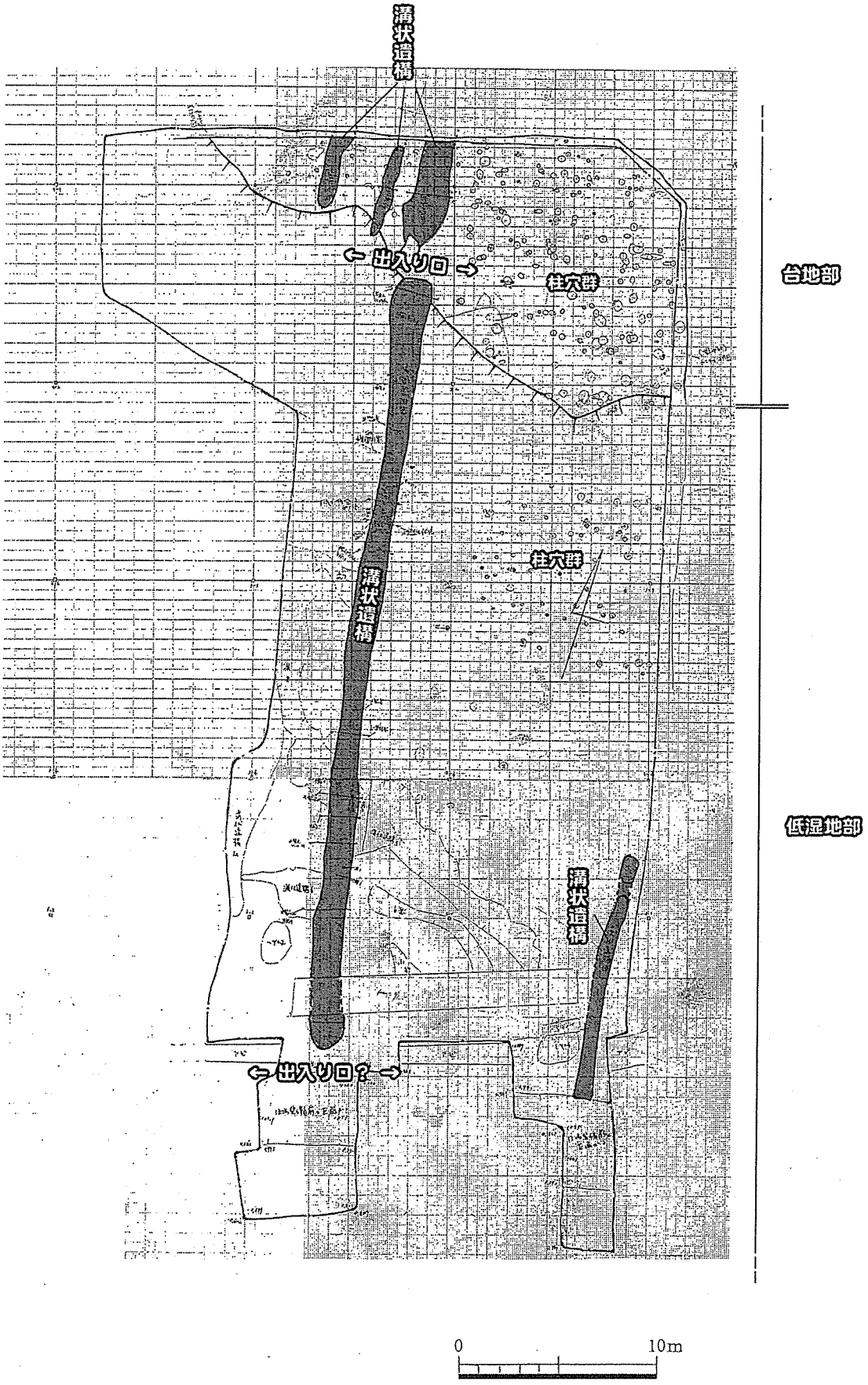
続いて、Ｄ区では、2 本の溝と竪穴住居状の遺構、木棺状の遺構が検出され、土器やガラス小玉（こだま）、金銅製飾り板（こんどうせいかざいた）、竹籠（たけかご）などが出土しました。

Ｃ、Ｄ区双方で確認された溝は、豪族などの屋敷を区画するための溝であった可能性があります。前者のＣ区では 3 本の溝が併行して掘られており、屋敷への出入り口であった場所も確認されています。また、後者のＤ区では 2 本の溝の内、1 本が直角に折れ曲がっており、ここが屋敷地のコーナー部分にあたると考えられます。これらの溝から出土した戦国時代の土器の中には、防長系（山口県内でつくられた）の足鍋（あしなべ）（3 本の足が付いた素焼きの鍋）などが含まれていることから、かつてこの屋敷に住んだ人物が山口と深い関係をもっていたことがわかります。

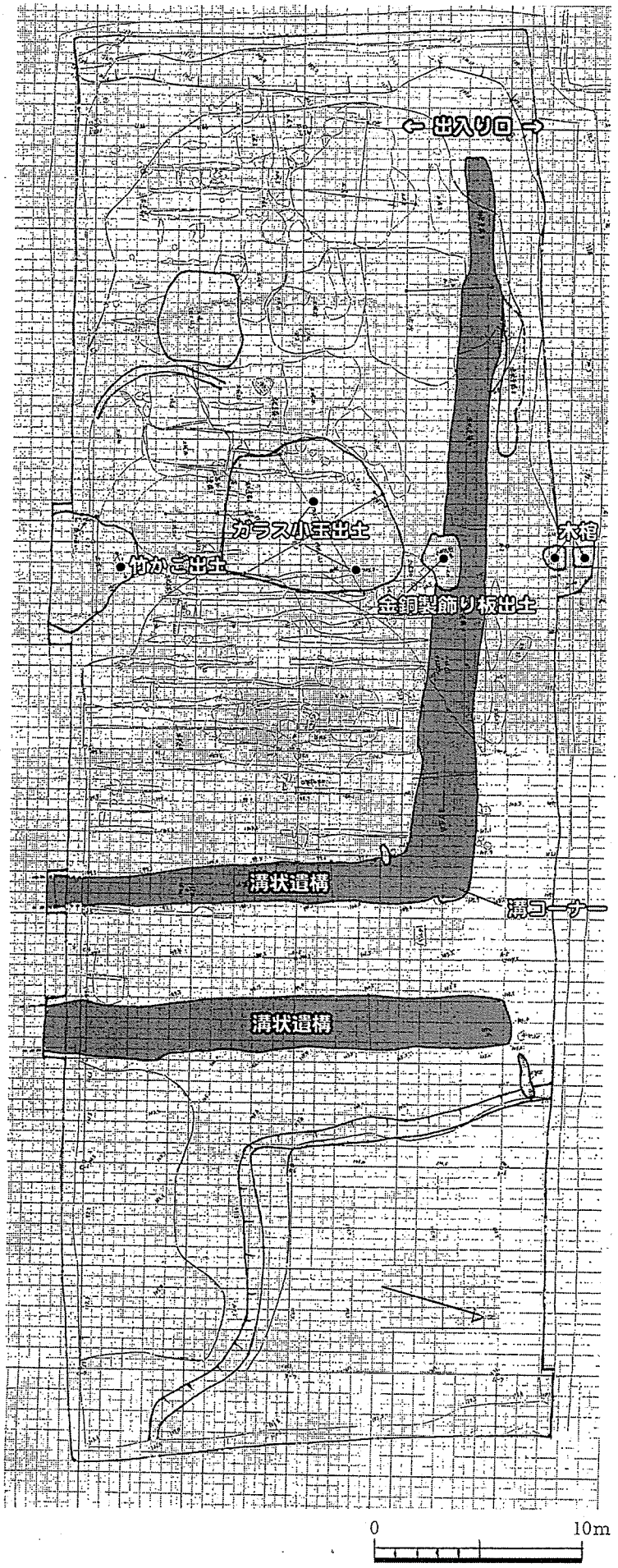
Ｃ区の溝から出土した土器（奥の 2 点が防長系の足鍋）



篠原東遺跡群C・D区　遺構配置図（1/600）



篠原東遺跡群Ｃ区　遺構配置図（1/300）



篠原東遺跡群D区　遺構配置図（1/300）